



阪本一房

●会期／4月23日(土)～6月5日(日)

出口座と阪本一房  
—現代人形劇の継承と発展—

開館30周年記念 令和4年度(2022年度)春季特別展

吹田市出口町にはかつて出口座とよばれる人形芝居の拠点がありました。座長は吹田市出身の阪本一房氏(通称：いっぽうさん)です。その劇団は糸あやつり人形をつかい、北摂地域の民話をとりあげた新作の演目を中心に、昭和50年(1975年)から平成12年(2000年)までさまざまな活動に精力的に取り組みました。糸あやつり人形のほかにも指人形を操作する演目もあり、また出口座のみならず学校やメイシアターなどでも数々の公演をおこないました。その一方、月刊の機関誌『出口座』を発行し、人形芝居の普及につとめました。出口座が残した足跡は現代人形劇の歴史、とりわけその地方的展開を知る上で貴重なものです。このたび本館に寄贈された出口座関連資料を中心に本年の春季特別展示を開催するにあたり、ここに本号の特集記事を組みました。現代人形劇の継承と発展を心から願ってやみません。

(特別館長 中牧弘允)

## いっぽう 阪本一房さんと人形芝居出口座 - 「出口座と阪本一房」展にことよせて -

私が阪本一房さんと初めて出会った頃は「阪本さん」と呼ばれていました。私が本名である一房（かずふさ）を「いっぽう」と読み間違え「いっぽうさん」と勝手に呼びはじめたら、いっぽうさんも気に入ったのか自ら「いっぽう」とつかうようになりました。昭和49年（1974年）のことです。その1年9か月後に「人形芝居出口座」を立ち上げることになるとは思っていませんでした。

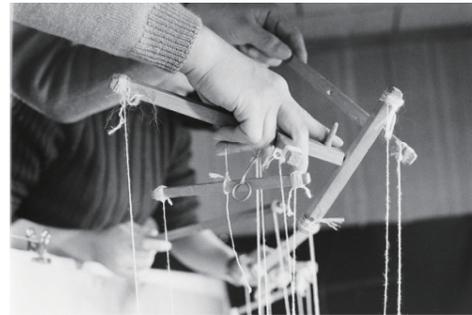
「人形芝居出口座」は Marionette 常設劇場です。いっぽうさんの長年の夢でした。吹田市出口町にあった社員寮の食堂を改造して作りました。丘の中腹にあり木造平屋の食堂は少し斜めに傾いていて、入る時も出る時も人家の間の細い道を通らなければなりません。舞台も座席も全ていっぽうさんと座員の手作りです。37席の小さな劇場でした。



出口座

いっぽうさんは常々「人形芝居は総合芸術や、演劇のエッセンスや」と言っていました。操り手は役者であり、人形の演出家であり、人形を創る美術家であり、脚本も書く作家でなければいけないと言っていました。それをやってのけたのがいっぽうさんです。演劇や美術の学校で学んだわけではなく高等学校卒ですが博学多才でした。全て独学で学び好奇心と努力と執念の人でした。そんな人が人形劇に惚れ込んだのです。

いっぽうさんの表現する人形劇やその考え方は新鮮で革新的でした。それまでの人形劇に対する既成概念を超えた表現力が魅力でした。「真剣だけど真面目じゃない」「自由奔放のように見えて計算されている」その独特な「しなやかさ」は他の操り手の真似出来ないものでした。



バーガーを持つ手

例えば大阪人形座の「和尚さんと小坊主（江上フジ作）」と言う Marionette があります。

当初の配役はいっぽうさんが和尚、私が小坊主でした。実は怠け者と狸と遊びたい和尚とその仲間に入って一緒に遊びたい小坊主のお話

です。つまらないお話だと思われるかもしれませんが、和尚さんと小坊主や狸たちとの駆け引きの楽しさや子ども達が大好きな鬼ごっこやかくれんぼ等に類似した演出が盛り込まれています。特に和尚さんの間の抜けたほのぼのとした性格を表現するのはいっぽうさんしかいないでしょう。台詞と台詞の行間こそ人形が生き生きと芝居をするのです。単純な作品こそその操り手の「技量」と「芸」が試されていると思います。

また指使い人形でも人形本来がもっている親しみやすさや滑稽さ、おおらかな人間性を表現しまし



いっぽうさんの操り



「スイカ泥棒」の指使い操り風景

た。十八番の「金の斧銀の斧」は良い木こりと悪い木こりを巧みに演じ分け、その「しなやかな」動きでひょうきんで憎めない人間性を表現しました。



和尚さんと小坊主稽古風景



雪虫の藤蔵

Marionette 作りにおいても構造を工夫し独自の造形美を確立しました。

大阪人形座の頃より頭は小さく背丈も4頭身、構造的にも腰を省略し簡素化、日本人の体形に似せました。

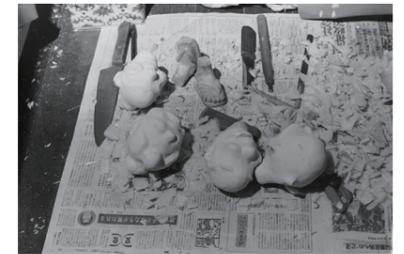
「電車に乗っていても、ポーと座ってたらあかんで、人を良く観察するんや、よく見てこの人はどんな性格か仕事は何をしてるか想像しなあかん」「登場人物に似た人を見つけてこさえたらええ」「人形は横顔が大事」等、当時いっぽうさんが言っていた言葉です。ですからいっぽうさんの創る人形の顔は、座員や友人、時には自分自身がモデルになっていることがありました。

しかもあまり美しくありません。どちらかと



人形制作中の阪本一房さん

言えばゴツゴツしてジャガイモのようです。テレビで見る人形劇とは違っていました。やはり出口座独自の人形芝居を創りたいという強い思いがあったのでしょう。



人形の頭

またいっぽうさんは出口座創設の10年程前から吹田北摂の民話を掘り起こしていました。当時は人形劇にしようという思いからではなく吹田と言う郷土に強い誇りと興味を持っていたからだと思います。そしてそれらの思いは、出口座創設3年後の「雪虫」から始まった北摂の創作民話糸操り人形芝居7作品に結実しました。



羅城門のお婆

この度吹田市立博物館で出口座と阪本一房の特別展が開催され、大正時代西洋の息吹を受けて東京築地小劇場ではじまった Marionette が、出口座とどのように繋がっていくのか、また日本の糸操りやヨーロッパの Marionette との違いにも注目して頂けたらと思います。日本の現代人形劇史のなかで出口座やいっぽうさんが果たした役割を再認識していただければ大変嬉しく思います。（元出口座座員 山下恵子）

## 令和4年度(2022年度)企画展 「西村公朝 挿絵原画の世界」(仮題)

会期：令和4年(2022年) 6月18日(土)～7月10日(日)



西村公朝著『仏像は語る』(新潮社、1990年)掲載

「博物館だより No.81」でご紹介した令和2年度(2020年度)企画展は新型コロナウイルス感染症の感染予防対策によって延期となり、今年度ようやく開催する運びとなりました。この企画展は、あまり紹介されることがなかったものの、当館が多数収蔵する西村公朝の図やイラストに焦点を当てた展覧会です。仏像修理の道へ進んだことを契機に、仏の教えとその表象としての仏像について理解を深めていった西村は、昭和51年(1976年)出版の『仏像の再発見』(吉川弘文館)を皮切りにして、仏教や仏像に関する著作等を数多く残しました。語りかけるような文体、精密でわかりやすい図やイラスト、心を和ます仏のやさしい姿を描いた挿絵——どの著作にも西村独自の世界が認められます。

本展でご紹介する著書の一つ、平成2年(1990年)出版の『仏像は語る』(新潮社)は、雑誌『芸術新潮』(新潮社)に昭和63年(1988年)5月号から翌年12月号まで連載した自伝的なエッセイ(全20回)をまとめたものです。仏像修理技術者として出会った仏像たちの様々なエピソードをメインに、仏像制作や愛宕念仏寺の再興にも触れ、西村の歩みを読みやすい文章で綴った一冊です。

雑誌連載ではエッセイ一編と写真一点が掲載されていましたが、単行化に際してイラストの追加がなされています。上図もその一つ。小雨降るなか、西村が善願寺(京都市)の神木に不動明王を彫ったというエピソードに添えられています。

展覧会では挿絵約50点の原画を展示します。原画から感じられる味わい深い西村の世界をお楽しみください。(当館学芸員 河島明子)

### 同時開催！ 「さわる月間」

企画展と同時期に開催する「さわる月間」期間中は、「さわる」や「体験」がいっぱいです。ご家族などでぜひご来場ください。





令和4年(2022年)1月12日、関西大学教授の菅原慶乃先生に、吹田の人形芝居・出口座の研究などについてお話を伺いました。

**菅原慶乃(すがわら よしの)**

立命館大学国際関係学部卒業。  
大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。  
現在は関西大学文学部教授。  
東アジア中華圏の映像文化研究を専門としている。

**中牧：**ネットで「出口座」を検索すると、すぐ先生のPDFの論文が出るんです。出口座と阪本一房に関して、先生の論文をもとに、皆さんこれからいろいろ発言したり、モノを書いたりするかと思えますから、まずはその論文についてお伺いしていこうと思います。

**菅原：**地域の文化資源を使った町おこし、人と人との繋がりを研究するというプロジェクトだったんです。私は出口座を取り上げましたが、堺市の博物館と提携し刀工について研究をされている先生もいて様々でした。

出口座という、かなり資料としてもおもしろいものが残っていそうなんだけれども、全貌がまだよく分からない状況だったので、どのようなことができるのか検討しながら、始めたという次第です。

**中牧：**それまで、出口座の公演を鑑賞したり、阪本一房さんなどそういう関係者と面識があったのですか。

**菅原：**いいえ。全くなかったんです。出口座自体も平成12年(2000年)に解散して、全く活動されていなかったの、接点もなかった。ただ、私がもともと中国の映画史を専門に研究しておりまして、その中で映画館ではない、劇場でないところで、映画だとか、幻燈、スライド上映、教育目的で上映するということに凄く興味を持ち始めてたんですね。ただ、先行研究がなかったので、日本の教育の中で幻燈を使ったりという流れが日本にあったので、まず日本の状況を調べようと思って調べているうちに、阪本一房さんがされてた、大阪人形座で、人形劇の映画をつくったり、幻燈をつくったりというものがあったということは知ってたんです。その程度だったんですよ。で、吹田にあるんだったら、もしかしたら残っているのかなってというような、そういうところから興味を持ちました。

**中牧：**山下恵子さん(元出口座座員)から話を聞いて、プロジェクトを立ち上げてみようと思ったというのと、全然違いますね。

**菅原：**全然違うんです。私もどこから手をつけていいのか全然分からなくて。例えば、出口座が出している機関誌が吹田市の中央図書館に所蔵されているので、図書館に行きまして、色々雑誌を読んで、その幻燈をつくったという記録が書かれてたので、もう少し詳しいこと知りたいなと思いまして。出口座は、図書館とも凄く関わりの深い劇団だったので、もしかしたらご存知の方がいるかと思って聞いてみたところ、ちょうど山下さんが中央図書館で、マリオネット人形をつくる講座をされていたんです。だから行ってみたらどうですかと誘って下さって、それで講座に行ったというのが、山下さんとの出会いなんです。

**中牧：**なるほど。会報は200号ほどあり、毎月出していますよね。きちんと製本されて、図書館におさめられて。

**菅原：**25年も欠かさずずっと、出されてきたんですね。そんなことやってる劇団はないと思うんで。

**中牧：**出口座の歴史とか活動を知る基礎資料みたいなものですよね。で、それを修復し、デジタル化をするというプロジェクトに進んでいく、その流れを教えてください。

**菅原：**まず、山下さんにお話を伺って、私が一番関心を持っていたのが、映画だとか幻燈が残っているかどうかだったのですが、それはもうないということが、お会いしてすぐにわかりました。でも、よくよくお話を聞くと、昔つくったお人形や公演のカセットテープ、公演の音声が残っているということがわかり、ただ、そのテープがもう切れてしまったり、癒着してしまったりしているものがあるとのことで、じゃあまず、その音声がなくなってしまったらダメなので、まずそれを残そうということになりました。

**中牧：**デジタル化したものをベースにして・・・。

**菅原：**そのあとに、吹田の中央図書館に音声を寄贈し、皆に聞いていただけるようにしました。でも、それ以上の活用方法が思いつかなかったんですけども、山下恵子さんが、江戸糸操りの人形の劇団の方と、出口座のその音声テープを使って公演を復活させるというプロジェクトを立ち上げ、音声テープを活用してやってみようとなりまして、「阪本一房の生誕100周年」の公演ビデオの企画ができたということです。

**中牧：**中央図書館のほうでも、展示とか、ワークショップとか、そういうものをされてましたよね。

**菅原：**そうですね。それはもう、もっぱら山下さんの力なんです。ずっと欠かさず、前の中央図書館の1階のロビーの奥に、ガラスケースがあって、そこで季節が変わるごとに展示を入れ替えているということをしていただのと、あと、2000年代に入ってから、2回ぐらいは、阪本一房さんと出口座の回顧展を、ご自分で企画して、展示をするという活動

を地道にされていたんですね。あと、資料集もつくられていました。

**中牧：**一方では、先生を中心にした、音声やら、映像の記録というものと、実際のお人形を使った公演とかワークショップがつながり、活動がうまく、同じ時期に合流したというか。

**菅原：**そうですね。でも、どちらかというところ、山下さんが中心に、全部歯車が動いているような気がします。山下さんが中心に、情報発信をされてきたので、端っこの方にいた私も上手く波にのれました。それで、こちらでお手伝いさせてもらったものを使って、また山下さんが新しい企画を立てられました。

**中牧：**メイシアターや浜屋敷でも、公演されてましたよね。それにも、関わっていたのですか。

**菅原：**はい、そうです。メイシアターでの公演は江戸糸あやつり人形の上條充さんの発案で、人形劇の図書館の瀧見英明さんの協力を得て山下さんと3人で企画されたもので、1回限りの復活、出口座復活公演という風に銘打っていました。その記録映像をつくろうって言い出したのは、私の方です。

最初は簡単にビデオで、舞台を撮れればと思っていましたが、今後舞台上で、出口座の演目が演じられる事はないので、やっぱり本格的に撮ろうと思って、業者をお願いしました。カメラ2台で、全体と手元を分けて撮ってもらって、手元の動きがちゃんと入るような形で画面をつくって編集してもらったんですね。

それを見た山下さんが、さらに人形の動かし方の記録「このときにはこういう風に指を動かす」みたいなものをつくるということになりました。

**中牧：**発展していききましたね。

**菅原：**そうなんです。それで、冊子をつくってくださり、私はそれを編集し書冊にし、ブルーレイにつけてお配りしました。

**中牧：**最初は音声だけだったのが、思わぬ事で、これが映像記録にまで発展した。元の映像がなくても、再現したときの映像記録につながった。貴重ですよな。

**菅原：**そうですね。本当よかったと思います。舞台ですから、人形がどういう風に動くのかというのも、映像がないと中々分からないところがありますので。

**中牧：**大黒柱(阪本一房氏)が、突然亡くなって、そのあと、元団員の方たち、皆さん協力して、資料も残されたと思いますが。

**菅原：**山下さんがおっしゃってたのは、阪本一房さんが亡くなる半年前に、家主の代替わりのため出口座の建物を明け渡すことになったのですが、その少し前に阪本一房さんから出口座の創作民話マリオンネット7作品を山下さんに預ける依頼があったそうです。そして、山下さんが7作品以外にも目についた重要なものを全部引き取りました。その後阪本さんは建物を明け渡す前に残ったもの全てを焼いてしまったようです。

**中牧：**そういう資料を保管する場所の候補として、中央図書館があったと思いますけれども、最終的にはうちの吹田市立博物館に、一括資料として、おさめられました。ちょっと紆余曲折ありましたが、寄贈が決まってからすぐ、受け入れ体制を整えて、さらに学芸員実習の展示で、一般公開となりました。

**菅原：**ええ。特別展示室の、一番奥のところに、出口座のコーナーがあって、私も観覧させていただいたと思います。

**中牧：**そういうふうにすぐ踏み出せたのは、先生が書かれた論文があったからですね。

それでもた、山下さんが、几帳面で、いろいろ記録を保存し、整理されていて、資料としての情報価値は高かった。

**菅原：**阪本一房さんは、全て記録に取るのを、徹底されていて、山下さんも徹底してなんでも残してお

くことを貫かれておられたんです。そのおかげで私も、論文ができた。私よりも山下さんと一房さんがずっと、バトンを繋いでくださったのが一番大きいと思います。

**中牧：**令和4年(2022年)4月から、本格的に特別展ということで、紹介させていただきますけれども、何か期待するところや注文はありますか。

**菅原：**これは本当に難しいんですけど、人形劇なので、お人形が動いてないと、そのよさが、ひろく見えないと思うんです。ですから、人形を皆で持って、動かすとか、即興でお芝居ができたり、何かそういうふれあい、今はコロナもあるのでちょっと難しいかもしれないですけど、実際に手に取ってもらって、動かす事ができるといいなと思います。

**中牧：**命が吹き込まれますね。

**菅原：**そうだと思うんですよね。出口座の展示をやりますと、お年寄りが多いんです。ちょっと平均年齢が高めなところがあるので、ちびっ子もたくさん来てもらえるような展示になるといいですね。

**中牧：**そうですね。大体、一房さんが活躍していた頃は、山下さんを含め若い女性たちも活躍していました。

**菅原：**そうですね。ちょうど子育て中のお母さん世代が中心になってました。ぜひ子供さんを連れて、出口座を見に来てほしいですね。

# 開館30周年記念 令和4年度(2022年度)春季特別展 「出口座と阪本一房ー現代人形劇の継承と発展ー」 関連イベント

## 講演会 いずれも定員 40 名。多数抽選。

- ①4月23日(土) 午後2時～3時30分  
「現代人形劇の継承と発展」  
●講師/瀧見英明氏(人形劇トロッコ主宰・人形劇の図書館館長)  
●申込み切4月12日(火) 必着
- ②5月3日(祝・火) 午後2時～3時30分  
「吹田の人形芝居・出口座が残した小さくて大きな文化財」  
●講師/菅原慶乃氏(関西大学教授)  
●申込み切4月21日(木) 必着
- ③5月7日(土) 午後2時～3時30分  
「近代新興人形劇・『紙芝居の作り方』から出口座まで」  
●講師/堀田穰氏(京都先端科学大学名誉教授)  
●申込み切4月26日(火) 必着
- ④5月21日(土) 午後2時～3時30分  
「昭和初めの洋風人形劇を語る～孟府と一房」  
●講師/浅野詠子氏(ジャーナリスト)  
●申込み切5月10日(火) 必着
- ⑤5月29日(日) 午後2時～3時30分  
「最後の街頭紙芝居屋さん 阪本一房先生 声・姿その心を貴重ビデオでお会いいただき その存在の大きさ、思想に迫る」  
●講師/村田利裕氏(京都教育大学教授)  
●申込み切5月17日(火) 必着

## 人形劇上演 定員 40 名。多数抽選。

- 5月15日(日)  
午前10時30分～11時30分  
午後1時30分～2時30分  
「江戸荒物」(出口座 マリオネット落語)  
演出・美術/阪本一房・落語/露の五郎兵衛  
「かっぱれ」・「黒髪」  
(江戸糸あやつり人形)  
●出演/山下恵子氏(元出口座座員)  
上條充氏・福田久美子氏(江戸糸あやつり人形)  
●申込み切5月2日(月) 必着

## 紙芝居上演 定員 40 名。多数抽選。

- 5月22日(日) 午後2時～3時  
「新田の蛇まくら」  
「月の光でさらさっしやい」ほか  
「阪本一房を語る」  
●出演/柿本香苗氏・高鳥公子氏(元出口座座員)  
●申込み切5月10日(火) 必着

## ワークショップ

- ①4月30日(土) 午後1時30分～3時30分  
「簡単マリオネットワークワークショップ～作って遊ぼう」  
●定員/18名 多数抽選  
●講師/山下恵子氏・柿本香苗氏・富田順子氏(元出口座座員)  
●申込み切4月19日(火) 必着
- ②5月28日(土) 午後2時～3時30分の間随時  
「マリオネット操り講座～操って遊ぼう」  
●場所/3階ロビー(観覧料が必要)  
●講師/山下恵子氏・柿本香苗氏・富田順子氏(元出口座座員)  
●申込不要

## 歴史講座 定員 40 名。多数抽選。

- 4月29日(祝・金) 午後2時～3時30分  
「詳説! 出口座と阪本一房展」  
●講師/藤井裕之(当館学芸員)  
●申込み切4月19日(火) 必着

## 特別館長ギャラリートーク 定員 15 名。多数抽選。

- 6月5日(日) 午後2時～3時  
●場所/特別展示室(観覧料が必要)  
●講師/中牧弘允(当館特別館長)  
●申込み切5月24日(火) 必着

## クイズラリー

会期中土・日・祝日 午後1時～4時30分  
博物館ボランティアの会 吹博の会 ※景品あり

## 民話の里 きしべを歩く 定員 30 名。多数抽選。 民話の朗読・解説・まち歩き

- 6月4日(土) 午後1時30分～4時30分  
吹田まち組  
●申込み切5月24日(火) 必着

## 申込方法

吹田市役所ホームページの電子申込システム(4月1日より受付)か、はがき、FAXにイベント名、参加者全員の氏名、郵便番号、住所、電話番号を記入のうえ締切日までに博物館まで。

吹田市立博物館だより 第89号 令和4年(2022年)3月20日発行  
編集・発行/吹田市立博物館  
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL 06(6338)5500 FAX 06(6338)9886 ホームページ <http://www2.suita.ed.jp/hak/>



この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は26円です。  
森林認証紙と植物油インキを使用しています。